



ハッピーバースデー

青木和雄 吉富多美

ハッピーバースデー

青木和雄 吉富多美

青木和雄（あおき かずお）

神奈川県横浜市に生まれる。横浜市教育委員会指導主事、横浜市立小学校長等を経て、現在、教育カウンセラー、法務省人権擁護委員、神奈川県子ども的人権専門委員長、保護司。

主な著書に『ハートボイス』『ハッピーバースデー』『ハードル』『HELP!』（金の星社）など。横浜市在住。

吉富多美（よしとみ たみ）

山形県新庄市に生まれる。横浜市児童福祉審議会委員等を務める。著書に『アニメ版ハッピーバースデー』『アニメ版ハードル』『リトル・ウイング』、青木和雄との共同執筆作品に『イソップ』『ハードル2』（金の星社）などがある。横浜市在住。

ハッピーバースデー

初版発行 2005年4月

第15刷発行 2005年9月

作 者 青木和雄 吉富多美

発行所 株式会社 金の星社

〒111-0056 東京都台東区小島1-4-3

TEL. 03(3861)1861 FAX. 03(3861)1507

振替00100-0-64678 <http://www.kinnohoshi.co.jp>

印 刷 三浦企画印刷

製 本 東京美術紙工

乱丁落丁本は、ご面倒ですが小社販売部宛ご送付下さい。

送料小社負担にてお取替えいたします。

© Office Aoki 2005

263p 19cm ISBN4-323-07056-X

Published by KIN-NO-HOSHI SHA Co.,Ltd. Tokyo Japan

ハッピーバースデー
目次

第一章

バスデーケーキ

8

幸せ探し

17

呼び出し

22

直人とあすか

32

希望の星

43

第二章

ネムノキ

52

情のない女

64

宅配便

75

心の水

81

静代の秘密

87

旅立ち

95

第三章

転校生

112

命は恵み

124

エスケープ 135

養護学校 145

星なつき 159

泣き虫 164

十二歳のアルバム 173

第四章

バトル 184

直人の生きる道 189

別れ 198

ミズキの花 206

第五章

記憶 218

六十億に一つの奇跡 230

あすか 240

あとかき 258

ハッピーバースデー

青木和雄 吉富多美

装画 藤原ゆみこ

装丁 室町晋治

ハッピーバースデー
目次

第一章

バスデーケーキ

8

幸せ探し

17

呼び出し

22

直人とあすか

32

希望の星

43

第二章

ネムノキ

52

情のない女

64

宅配便

75

心の水

81

静代の秘密

87

旅立ち

95

第三章

転校生

112

命は恵み

124

エスケープ 135

養護学校 145

星なつき 159

泣き虫 164

十二歳のアルバム 173

第四章

バトル 184

直人の生きる道 189

別れ 198

ミズキの花 206

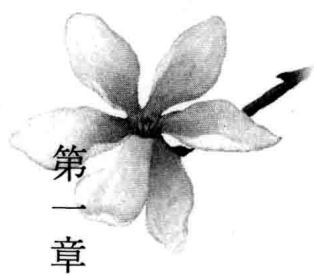
第五章

記憶 218

六十億に一つの奇跡 230

あすか 240

あとかき 258



第一章

バースデーケーキ

「おまえ、生まれてこなきやよかったよな。」

電子レンジで温めたカレーを、器用に二つの皿にとりわけながら直人^{なほと}がいった。レトルトカレーのあまずっぱい匂いが、キッチンいっぱいに広がった。

あすかはうつむいて自分の喉を強くつまんだ。

「おまえさ、ママがバースデーケーキを手にして、すぐにも帰ってくるなんてさ、すっげえあまい期待してないか。」

あすかをからかうように直人は眉を持ち上げていった。今日はあすかの十一回目の誕生日だった。

「別に思っていないけど……。」

小さな声であすかは答えた。グラスにミネラルウォーターを注ぐ。水を飲みほすあすかの喉は、つまんだ指の跡で赤黒く変色していた。

スプーンでカレーとご飯をカチャカチャと混ぜこみながら、直人はあすかの様子を楽しそ

に見ている。あすかは一口食べるごとに柱時計を見上げていた。母親の静代の帰りを待っているのがありありと見てとれた。

「さっきから何回時計見てんだよ。期待なんかしてもムダだよ。ママにはおまえの誕生日よりずっとずっと大事なもんが山ほどあるのさ。」

直人が口の端をゆがめていった。あすかはがくんと首をうなだれる。指で喉をつまみながら思っていた。

——お兄ちゃんという通りかもしれない。

——時々ママはあすかを忘れてしまふみたい……。

静代が自分を避けているのをあすかは薄々感じている。兄の直人へ注がれる静代の期待と愛情を、妬ましく思うこともあった。あすかが静代の視線をとらえようとすると、静代はするりと上手に視線をかわした。家にいてもいつも迷子になっているような心細さを、あすかは感じていた。

あすかは喉をつまむ細い指に力を入れる。「あまい期待」と簡単にはあきらめられない、祈るような思いを捨てきれなかった。

「去年だってその前の年だってケーキを買ってきてくれたもの。ママはちゃんとあすかの誕生日をしてくれたもの。」

誕生日は迷子のあすかを静代が探しにきてくれる日だった。あすかが静代の視線の中に入れる唯一の日だった。

「去年まではパパがいたからね。良い母親をしていますっていうママのためのセレモニーさ。」直人にしては珍しくおさえた静かな声だった。あすかは大きく目を見開いて、まばたきもせず直人を見つめている。直人はスプーンに山盛りにしたカレーを、大きく開けた口の中に押しこんだ。

「かけてもいいぜ。ママはさ、おまえの誕生日のことなんかすっかり忘れてるよ。」

口を動かしながら直人がいった。あすかの目に涙が溢れた。あわててあすかは目を伏せた。

「そんなことないよ。ママはあすかの誕生日を忘れたりしないもの。」

あすかは震える手で喉をつまんだ。

悲しみが溢れそうになると、あすかは息ができないほどの心の痛みに襲われた。その痛みに耐えるために、いつの頃からか喉をつまむようになった。悲しみが増すにつれてつまむ力も強くなり固いしこりとなった。血がにじむほどの痛みにあすかは歯を食いしばって耐えていた。その瞬間だけ心の痛みから解放された。

「おまえさ、算数のテスト二十点だったんだってな。理科は十二点だっけか。おまけに授業は上の空で、先生に叱られたそうじゃん。」

直人がクツクツと笑っていった。

「そんなバカな子はママ嫌いだってさ。あすかなんて、生まなきやよかったっていったぞ。」
怒りがこみ上げてきた。あすかはグラスをつかむと、思いっきり直人の顔に水をかけた。不意をつかれた直人は頭から水をかぶった。

「何すんだよ。信じらんねえ、このタコ！」

髪から水をしたたらせながら直人はどなった。あすかはすばやく自分の部屋に逃げこんだ。ボタンとドアを閉めるとどつと涙が溢れてきた。

——ママがあすかを生まなきやよかったなんて、いうはずないじゃない……。

きりきりと心が痛む。胸の奥から悲しみがせり上がってきて、あすかはオウオウと犬の遠吠えのような呻きをあげた。

——あすかだってお兄ちゃんとおんなじ、パパとママの子なんだから……。

——お兄ちゃんなんか、大っ嫌いだ。

苦しさに呻きながらあすかは直人を呪った。

泣き疲れて眠ってしまったあすかは、にぎやかな静代の笑い声で目が覚めた。

そつと部屋のドアを開けると、リビングから直人と静代の話し声が聞こえてきた。